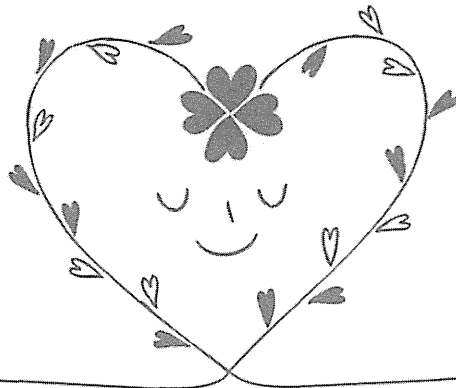


薬物依存症者をもつ家族を
対象とした心理教育プログラム

「家族の病氣」としての 薬物依存症



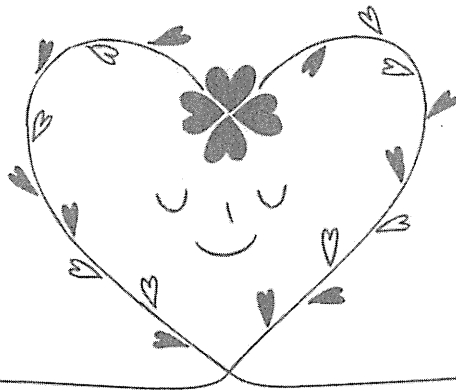
薬物依存症者をもつ家族を
対象とした心理教育プログラム

本人の望ましい行動を増やし、
望ましくない行動を減らす



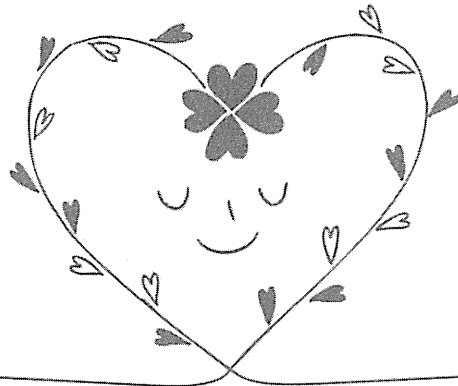
薬物依存症者をもつ家族を
対象とした心理教育プログラム

本人の望ましい行動を増やし、
望ましくない行動を減らす



薬物依存症者をもつ家族を
対象とした心理教育プログラム

暴力への対応



薬物依存症者をもつ家族を
対象とした心理教育プログラム

暴力への対応

分担研究報告書
(2-4)

司法関連施設における少年用薬物乱用防止教育ツールによる介入効果と その普及に関する研究

分担研究者 松本俊彦 独立行政法人国立精神・神経センター精神保健研究所
薬物依存研究部 診断治療開発研究室長
研究協力者 谷淵由布子 同和会千葉病院 精神科医師
今村扶美 独立行政法人国立精神・神経センター病院 リハビリテーション部
心理療法士
小林桜児 独立行政法人国立精神・神経センター病院 精神科医師

研究要旨：【目的】本研究の目的は、麻薬取締官による、執行猶予付き・保護観察なしの初犯の薬物乱用者に対する自習ワークブックを用いた再乱用防止プログラムの効果、ならびに実施可能性と有用性を評価することである。【方法】薬事法関連犯罪によって保護観察なしの執行猶予判決がなされた薬物乱用者 36 名に対して、麻薬取締官が自習ワークブック『SMARPP-Jr.』を用いた再乱用防止プログラムを提供し、その介入前後における評価尺度上の変化を検討するとともに、その難易度と有用性に関する評価を行った。【結果】自習ワークブックによる介入により、薬物依存に対する自己効力感スケールの総得点および全下位因子の有意な上昇と、SOCRATES-8D の下位因子の一つ、「実行」の有意な得点上昇が認められた。また、対象者の 7 割弱が自習ワークブックの難易度を適切と捉え、8 割弱がその有用性を認識していた。【結論】麻薬取締官を介した自習ワークブックによる再乱用防止プログラムには、問題意識や治療意欲の深まりを伴った、薬物渴望に対する対処スキルの向上に資する一定の効果と意義、ならびに実施可能性があると思われた。

A. 研究目的

薬物乱用者の多くは法令で規制されている薬物を乱用していることから、少なくない薬物乱用者がその経過中に様々な司法関連機関とかかわりを持つ。今日、国際的には薬物依存症は「慢性疾患」と見なされ、治療・支援の継続性こそが回復に重要な要件と考えられるようになっており、その意味では、保健医療機関や地域の民間リハビリ機関での治療や支援だけでなく、刑事司法システム係属中にも継続的に治療プログラムの提供がなされるのが理想的である。近年、刑務所や保護観察所において、認知行動療法をベースにした再乱用防止プログラムが実施されるようになったのは、好ましい状況といえるであろう。

しかし、刑事司法システムとかかわりを持ちながら、刑務所や保護観察所との接点がない者もいる。それは、保護観察のつかない執行猶予判決を受けた初犯の薬物乱用者である。この種の薬物乱用者は比

較的依存が重篤化、深刻化していないこともあり、早期に介入を行うことで比較的容易に回復できる可能性があるが、現状では彼らに治療プログラムや回復につながる情報を提供するシステムは存在しない。

そのようななかで、厚生労働省地方厚生局麻薬取締部では、麻薬取締官がこの保護観察のつかない執行猶予者に対して再乱用防止のためのプログラムを提供する、という活動を試みている。もちろん、麻薬取締官は、職務上、多くの薬物乱用者との接触の機会があり、これまでの職務の中で非公式に薬物乱用者の個別相談に対応してきているが、本来、薬物関連犯罪の捜査、取り締まりを本務としており、プログラムを直接実施することには様々な制約を伴う。そこで、我々が開発した自習ワークブック『SMARPP-Jr.』を活用し、麻薬取締官が対象者に再乱用防止プログラムの自習を提案するという方法を採用することで、こうした制約を克服している。自習ワークブック『SMARPP-Jr.』は、薬物渴望の

引き金を同定し、それに対処するための認知行動療法的な再乱用防止スキルトレーニングを中心に構成されており、現在、保健医療機関を中心に展開している SMARPP などのプログラム(小林ら, 2007; 松本と小林, 2008; 松本, 2012) や、刑務所や保護観察所で実施されているプログラムとも多くの共通点を持っている。したがって、この麻薬取締部による試みは、地域支援資源や司法機関におけるプログラムとの一貫性という点でもメリットがあり、直感的には意義のある介入と思われる。しかしこれまでのところ、この試みの効果や意義、有用性についての客観的な評価はなされていない。

そこで、本研究では、麻薬取締官による、執行猶予付き・保護観察なしの初犯の薬物乱用者に対する自習ワークブックを用いた再乱用防止プログラムの効果、ならびに実施可能性と有用性を評価することを目的として、介入前後の評価尺度上の変化を検討した。よって、ここにその結果を報告する。

B. 研究方法

1. 対象

2010年12月から2012年12月において、初犯の薬事法関連事犯者であり、判決の内容が保護観察なしの執行猶予であった者は全国で122名であった。このうち、各地区麻薬取締部および分室の麻薬取締官が更生指導のための面接時に、SMARPP-Jr.のワークブックを用いた自習プログラムへの参加を提案したところ、48名がこれに同意し(同意率39.3%)、さらにワークブックの全課程を終了し、かつ、後述する、ワークブック実施前後に行う4つの自記式評価尺度が回収できた者は36名(最終的な参加率29.5%)であった。なお、表1に面接を担当した各地区麻薬取締部および分室における対象候補者、対象者の数を示す。

本研究では、この36名を最終的な分析の対象とした。この36名の平均年齢[標準偏差]は36.3[7.4]歳であり、男性25名、女性11名から構成されていた。なお、対象者における各種薬物の生涯経験率、ならびに最も頻用してきた主な薬物の内訳を、表2および表3に示す。対象者の中で最も生涯使用経験率が高いのは覚せい剤(83.3%)であり、次いで大麻(52.8%)、トルエン(41.7%)であった。また、

最も頻用し、主たる問題となっている薬物は、覚せい剤(58.3%)が最も多く、次いで大麻(22.2%)、トルエン(11.1%)であった。

2. 自習ワークブック

本研究における介入に用いた自習ワークブック『SMARPP-Jr.』は、我々が米国のMatrix modelを参考にして実践している包括的外来薬物依存治療プログラム(Serigaya Methamphetamine Relapse Prevention Program: SMARPP)のワークブックを平易化・簡略化したものであり、すでに少年鑑別所だけでなく、少年院や刑務所などでも使用されている。その内容は、薬物依存に関する疾病教育的な知識提供、ならびに、薬物欲求への対処法の習得という、認知行動療法的なスキルトレーニングから構成され、若年薬物乱用者の再乱用防止に資することを目的としている。ワークブックの分量は、49ページの「読む冊子」と19ページの「書きこみ用冊子」の2分冊形式からなり、表3に示すように全12回から構成されている。したがって、1日1回分ずつ仕上げて行けば、2~3週間で終了できることが想定されている。

3. 評価尺度・質問紙

1) DAST-20 (Drug Abuse Screening Test, 20 items)

これは違法薬物および医療用薬物などの乱用をスクリーニングする目的から作成された、20項目からなる自記式評価尺度である(Skinner, 1983)。本研究では、対象者の薬物問題の重症度を評価するために、肥前精神医療センターで作成された日本語版を採用し(鈴木ら, 1999)、介入前に実施した。日本語版DAST-20は、20点満点のうち、0点で「薬物問題なし」、1~5点で「軽度の問題あり」、6~10点で「中等度の問題あり」、11~15点で「やや重い問題あり」、16~20点で「非常に重い問題あり」と、4段階で評価することとなっている。

なお、この日本語版はまだ標準化の手続きはなされていないものの、各項目は、薬物に関連した心理社会的障害の有無に関する質問文となっている、明らかな表面的妥当性(各項目が測定する概念が字義通りの内容であること)を持つ尺度であり、すでに国内で汎用されている。

本研究では、本尺度による評価は、自習ワークブ

ック実施前にものみ行った。

2) 薬物依存に対する自己効力感スケール (以下、「自己効力感スケール」)

森田ら (2007) が独自に開発した、薬物に対する欲求が生じたときの対処行動にどれくらいの自信、または自己効力感を持っているかを測定する自記式評価尺度である。この尺度は、二つのパートから成り立っている。一つは、場面を超えた全般的な自己効力感に関する 5 つの質問からなる部分であり、「5 点: あてはまる」から「1 点: あてはまらない」までの 5 段階から選択して回答する。もう一つは、「薬物を使うことを誘われる」などの個別的な場面において薬物を使わないでいられる自信を尋ねる 11 の質問からなる部分であり、「7 点: 絶対の自信がある」「6 点: だいぶ自信がある」「5 点: 少し自信がある」「4 点: どちらともいえない」「3 点: やや自信がある」「2 点: 少ししか自信がない」「1 点: 全然自信がない」の 7 段階から選択して回答する。

なお、本尺度はすでに信頼性と妥当性が確認されている (森田ら, 2007)。本研究では、本尺度を介入前後に実施し、「全般的な自己効力感」合計得点、「個別場面での自己効力感」合計得点、および尺度全体の合計得点の変化を比較した。

本研究では、本尺度による評価は、自習ワークブック実施前後に各 1 回行った。

3) Stages of Change Readiness and Treatment Eagerness Scale, 8th Drug version (SOCRATES-8D)

Miller と Tonigan (1996) によって、アルコール・薬物依存に対する問題意識と治療に対する動機付けの程度を評価するために開発された、19 項目からなる自記式評価尺度である。原語版では、各質問は「病識 recognition (質問 1, 3, 7, 10, 12, 15, 17 の合計)

「迷い ambivalence (質問 2, 6, 11, 16 の合計)」「実行 taking-step (質問 4, 5, 8, 9, 13, 14, 18, 19 の合計)」という 3 つの因子構造を持つことが確認されている。

「病識」が高得点の場合には、「自分には薬物に関連した問題があり、このまま薬物を続けていれば様々な弊害を生じるので、自分を変えていく必要がある」と認識していることを示し、「迷い」が高得点の場合には、「自分は薬物使用をコントロールできていない、周囲に迷惑をかけている、依存症かも

しれないと考えている」ことを、そして「実行」が高得点の場合には、「自分の問題を解決するために何らかの行動を起こし始めている、あるいは、誰かに援助を求めようと考えている」ことを示すとされている。事実、SOCRATES 総得点は治療準備性の高まりと正の相関関係を示し (Mitchell et al, 2007)、動機付けの乏しい薬物乱用者に対する短期介入の場合には、高得点の者ほど治療継続率が高いという (Mitchell & Angelone, 2006)。

本研究では、薬物依存用に開発された SOCRATES-8D について、我々が逆翻訳などの手続きを経て作成した日本語版 (松本ら, 2009) を用いて、ワークブックによる介入の前後に評価を行った。本尺度はまだ標準化の手続きを終えてはいないものであるが、個々の項目には表面的妥当性が認められ、すでに我々の先行研究において、全項目に関する高い内的一貫性 (Cronbach α =0.798) が確認されている。そこで、本研究では SOCRATES-8D 合計得点について介入前後で比較を行った。なお、下位因子を構成する「病識」「迷い」「実行」については、該当項目に関する内的一貫性や因子妥当性が十分に証明されていないことから (小林ら, 2010)、今回は参考結果として提示するにとどめた。

本研究では、本尺度による評価は、自習ワークブック実施前後に各 1 回行った。

4) 難易度と有用性に関する評価

ワークブック終了後に、自習ワークブックの難易度と有用性に関する評価を、我々が独自に開発した自記式質問票を用いて行った。難易度については、「わかりやすい」「ややわかりやすい」「ふつう」「ややむずかしい」「むずかしい」の 5 段階から選択して回答を求め、有用性については、「大変役に立つと思う」「多少は役に立つと思う」「どちらともいえない」「あまり役に立たないと思う」「まったく役に立たないと思う」の 5 段階から選択して回答を求めた。そのうえで、得られた結果は、難易度については「わかりやすい」「ややわかりやすい」「ふつう」という回答を「内容の適切さ」に、また、有用性については「大変役に立つと思う」「多少は役に立つと思う」という回答を「内容の有用性」に、それぞれ整理したうえで分析を行った。

難易度と有用性に関する評価は、自習ワークブッ

ク実施後に1回だけ行った。

4. 実施方法

本研究は、厚生労働省麻薬取締部の事業の一環として実施された。

具体的な手続きとしては、麻薬取締官が対象候補者に対して、自習ワークブック「SMARPP-Jr.」を用いた学習を提案した。実施について同意が得られた対象者に対しては、3種類の自記式評価尺度（DAST-20、自己効力感スケール、SOCRATES-8D）への回答を求めるとともに（実施前評価）、対象者に「SMARPP-Jr.」のワークブックを渡した。その後より対象者には各自の自宅でワークブックの自習に取り組むように促した。実施するペースは原則として本人に委ねた。2週間程度を経過した頃に、担当の麻薬取締官が連絡をとり、進捗状況を確認した。ワークブックの終了が確認された場合には、各担当の麻薬取締官は記入済みのワークブックを回収するとともに、3種類の自記式評価尺度（自己効力感スケール、SOCRATES-8D、難易度と有用性に関する評価）への回答を求めた（実施後評価）。

回収された記入済みのアンケート用紙は匿名化がなされたうえで、研究分担者のもとに郵送され、解析がなされた。

5. 統計学的解析

対象における2つの自記式評価尺度（自己効力感スケールおよびSOCRATES-8D）の各項目得点を、ワークブックの実施前後でWilcoxon符号付き順位検定によって比較した。統計学的解析には、SPSS for Windows version 17.0を用い、両側検定にて $P < 0.05$ を有意水準とした。

C. 研究結果

対象者36名のDAST-20得点は1~18点に分布し、その平均得点[標準偏差]は7.24 [3.73]であった。

表4に、介入前後における自己効力感スケールとSOCRATES-8Dの得点変化の結果を示す。自習ワークブックによる介入の結果、自己効力感スケール総得点($P=0.001$)、その下位尺度である「全般的な自己効力感」($P=0.003$)、および「個別場面の自己効力感」($P=0.001$)の得点が有意に上昇した。一方、SOCRATES-8Dについては、下位尺度の一つであ

る「実行」($P=0.025$)の得点が有意に上昇した以外は、総得点、および下位尺度の「病識」と「迷い」の得点に有意な変化は認められなかった。

表5に、自習ワークブックの難易度と有用性に関する評価の結果を示す。難易度については、「わかりやすい」(19.4%)、「ややわかりやすい」(27.8%)、「ふつう」(19.4%)、「ややむずかしい」(19.4%)、「むずかしい」(13.9%)という結果であった。有用性については、「大変役に立つと思う」(36.1%)、「多少は役に立つと思う」(41.7%)、「どちらともいえない」(16.7%)、「あまり役に立たないと思う」(2.8%)、「まったく役に立たないと思う」(2.8%)という結果であった。

D. 考察

本研究は、司法警察官として、本来、違法薬物乱用者を取り締まる側の立場にある麻薬取締官を通じて、薬物乱用者に自習ワークブックによる再乱用防止教育提案する、という活動実践の効果を検証したものである。もちろん、麻薬取締官はこれまでも非公式には、個別面接や電話相談による再乱用防止支援の活動を行っており、なかには、平井の試みのように専門医療機関との連携によって薬物依存者の回復支援をする活動も行ってきた。しかし我々の知るかぎり、そのような活動の効果を学術的な手法で検証する試みはまったくなされておらず、薬物再乱用防止における麻薬取締官の役割と意義については、あくまでも経験的な認識にとどまっていた。その意味で、本研究はきわめて稀少な価値を持っている。

また、本研究が評価の対象としたこの再乱用防止活動自体が、わが国の薬物再乱用防止対策のなかで大きな意義を持っている。執行猶予となった初犯者の場合、依存がまださほど重症化、深刻化していない者も少なくないと考えられ、それだけに治療的介入の効果が大きい可能性がある。しかし、それにもかかわらず、保護観察のつかない執行猶予者に対しては、刑事司法システム内で再乱用防止プログラムを提供する機会は未整備のままであった。というのも、近年では刑事施設服役中や保護観察下において薬物再乱用防止教育プログラムが実施されるようになったが、保護観察のつかない執行猶予者の場合、矯正と保護観察のいずれの制度の対象からも外れて

しまうからである。その意味では、この麻薬取締官の活動実践自体が十分に画期的なものといえるであろう。

本研究では、自習ワークブックによる介入によって、自己効力感スケールの総得点、ならびにすべての下位尺度得点が有意に上昇した。これは、対象者がワークブックの自習によって、自らの薬物渴望を刺激する引き金に対する知識が深まり、薬物渴望に対する対処方法に自信が持てるようになった可能性を示唆している。しかしその一方で、薬物問題に対する問題意識や治療必要性の認識の深まりに関する指標とされている SOCRATES-8D については有意な得点上昇は見られなかった。我々が刑務所に服役する成人薬物乱用者（松本ら, 2011）や、少年鑑別所被收容者を対象とした自習ワークブックによる介入（Matsumoto et al, 2011）では、自己効力感スケール得点はむしろ低下し、SOCRATES-8D 得点の上昇といった効果が認められていた。その点で本研究の結果は我々の先行知見とは一致しておらず、むしろ「薬物問題に対する問題意識が深まらないまま、無根拠な自信だけが高まった」ともとれる結果であった。

しかし、以下の2点から、本研究の対象が示した得点変化は、必ずしも無根拠な自信上昇ではないことを示すものと理解すべきである。第一に、本研究の対象では、SOCRATES-8D の下位尺度である「実行」の得点は有意に上昇し、ある程度、問題認識の深まりと治療意欲の高まりが認められている。第二に、森田ら（2007）の研究でも、我々の研究でも（松本ら, 2011）、確かに短期的な介入ではいったん自己効力感スケール得点が低下するが、さらに続けて介入を継続すると、自己効力感スケール得点が上昇することが確認されている。その意味では、自己効力感スケールと SOCRATES-8D の下位因子の一部に有意な得点上昇という今回の結果は、ある程度の問題意識や治療意欲の深まりを伴った、薬物渴望に対する対処スキルの向上が得られたと考えるべきである。その意味では、麻薬取締官を介した自習ワークブックによる再乱用防止プログラムには一定の効果があるといえるであろう。

また、本研究では、対象の7割弱が自習ワークブックを「むずかしくない」と回答し、対象の8割弱

が「大変役に立つ」もしくは「多少は役に立つ」と回答していた。まったく同じ選択肢を用いて自習ワークブックの評価を行ったものとして、我々はすでに少年鑑別所被收容者（松本ら, 2009）と刑務所服役者（松本ら, 2011）における研究を行っている。そのうちの一つ、少年鑑別所における研究では、対象者の約65%が「むずかしくない」と、約9割が「大変役に立つ」もしくは「多少は役に立つ」と評価している。もう一つの刑務所における研究では、約8割が「むずかしくない」と、約76%が「大変役に立つ」もしくは「多少は役に立つ」と回答している。これらの先行研究と比較すると、本研究の対象者は、他施設の薬物乱用者とほぼ同様の難易度と有用性を感じていたと考えられ、自習ワークブックは、矯正施設におけるのと同様に、執行猶予中の初犯の薬物乱用者に対しても適切な難易度の内容であり、一定の有用性がある可能性がある。

ここで、本研究の限界について述べておきたい。本研究にはいくつかの限界があるが、なかでも主要な問題は以下の3点である。第一に、対象数が少ないことである。第二に、対照群を欠いていることである。このため、本研究で確認された効果が、執行猶予の判決がなされてもならない状況によるもの、あるいは、ワークブック実施の説明などで麻薬取締官が面接することによる効果であった可能性も除外できない。第三に、本研究では、評価のエンドポイントが、「断薬期間の長さ」や「地域の援助機関の利用」ではなく、あくまでも介入前後における評価尺度得点の変化という代理変数であることである。今後は、より多数の対象者を収集し、自習ワークブックによる介入を行わない対照群を設定し、プログラム終了後のフォローアップ情報にもとづいてエンドポイントを設定した研究が求められるであろう。

E. 結論

本研究では、麻薬取締官を介して、執行猶予付き・保護観察なしの初犯の薬物乱用者36名に対して、自習ワークブック『SMARPP-Jr.』による再乱用防止プログラムを提供し、その介入前後における評価尺度上の変化を検討するとともに、その難易度の適切さと有用性についての評価を行った。その結果、薬物依存に対する自己効力感スケールの総得点およ

び全下位因子の有意な上昇と、SOCRATES-8D の下位因子の一つ、「実行」の有意な得点上昇が認められ、問題意識や治療意欲の深まりを伴った、薬物渴望に対する対処スキルの向上に資する効果が推測された。また、対象者の7割弱が自習ワークブックの難易度を適切と捉え、8割弱がその有用性を認識していた。以上より、麻薬取締官を介した自習ワークブックによる再乱用防止プログラムには一定の効果と意義、および実施可能性があると思われた。

薬物乱用者の多くは、その経過中に保健医療機関や民間リハビリ施設だけでなく、様々な司法関連機関とかかわりを持つ。今日、国際的には薬物依存症は「慢性疾患」として継続的な支援の必要性が認識されている。この考えに従えば、国内のあらゆる場所や機会のなかで、薬物乱用者が再乱用防止に資する情報や支援に接することができる体制を整備することが理想的といえよう。その意味では、本研究でとりあげた麻薬取締官による実践は、支援体制の隙間を埋める意義と効果のある試みといえるであろう。

F. 研究発表

1. 論文発表

今村扶美, 松本俊彦, 小林桜児, 和田 清: 心神喪失者等医療観察法における物質使用障害治療プログラムの開発と効果. 精神医学 54: 921-930, 2012.

松本俊彦: 薬物依存症に対する新たな治療プログラム「SMARPP」: 司法・医療・地域における継続した支援体制の構築を目指して. 精神医学 54: 1103-1110, 2012.

松本俊彦: IV. 薬物関連精神障害の治療のプロセスと選択肢. 6. ワークブックを用いたグループ治療プログラムの実際. 日本精神科救急学会編 精神科救急医療ガイドライン: 規制薬物関連精神障害 2011年版, pp80-86, へるす出版, 東京, 2012.

松本俊彦, 成瀬暢也, 梅野 充, 青山久美, 小林桜児, 嶋根卓也, 森田展彰, 和田 清: Benzodiazepines 使用障害の臨床的特徴とその発症の契機となった精神科治療の特徴に関する研究. 日本アルコール・薬物医学会雑誌 47 (6): 317-330, 2012.

2. 学会発表

松本俊彦: 誰にでもできる薬物依存症治療. シンポジウム 23 薬物依存症臨床における倫理～医療の立場と司法の立場. 第108回日本精神神経学会学術総会, 2012.5.25, 札幌.

松本俊彦: 薬物依存の基礎から臨床、そして日常診療との関わりについて. シンポジウム 38 認知行動療法を取り入れた包括的外来治療プログラムの必要性. 第108回日本精神神経学会学術総会, 2012.5.25, 札幌.

今村扶美, 松本俊彦, 小林桜児, 和田清: 司法関連施設における薬物依存離脱指導の効果に関する研究 (2): 女性の薬物乱用者を対象とした介入. 平成24年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 2012.9.7, 札幌

高野歩, 川上憲人, 宮本有紀, 松本俊彦: 物質使用障害患者に対する認知行動療法プログラムを実施する医療従事者の態度の変化. 平成24年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 2012.9.7, 札幌

若林朝子, 小林桜児, 竹田典子, 今村扶美, 松本俊彦: 在日外国人女性薬物依存症患者に対する SMARPP-Jr.を用いた個別依存症教育プログラムの試み. 平成24年度アルコール・薬物依存関連学会合同学術総会, 2012.9.8, 札幌

G. 健康危険情報

なし

H. 知的財産権の出願・登録状況(予定を含む。)

1. 特許取得
なし
2. 実用新案登録
なし
3. その他
なし

引用文献

小林桜児, 松本俊彦, 大槻正樹, ほか (2007) 覚せい剤依存者に対する外来再発予防プログラムの開発—Serigaya Methamphetamine Relapse Prevention Program (SMARPP) —. 日本アルコ

- ール・薬物医学会誌, 42: 507-521.
- 小林桜児, 松本俊彦, 千葉泰彦, ほか (2010) 少年鑑別所入所者を対象とした日本語版SOCRATES (Stages of Change Readiness and Treatment Eagerness Scale) の因子構造と妥当性の検討. 日本アルコール・薬物医学会誌 45 (5): 437-451, 2010.
- 松本俊彦, 小林桜児 (2008) 薬物依存者の社会復帰のために精神保健機関は何をすべきか? 日本アルコール薬物医学会雑誌 43: 172-187.
- 松本俊彦, 今村扶美, 小林桜児, ほか (2009) 少年鑑別所における薬物再乱用防止教育ツールの開発とその効果—若年者用自習ワークブック「SMARPP-Jr.」—. 日本アルコール・薬物医学会雑誌, 44: 121-138.
- 松本俊彦, 今村扶美, 小林桜児, ほか (2011) PFI (Private Finance Initiative) 刑務所における薬物依存離脱指導の効果に関する研究: 自習ワークブックとグループワークによる介入—第1報—. 日本アルコール・薬物医学会誌 46: 279-296.
- Matsumoto T, Chiba Y, Imamura F, et al. (2011) Possible effectiveness of intervention using a self-teaching workbook in adolescent drug abusers detained in a juvenile classification home. *Psychiatry and Clinical Neurosciences* 65: 576-583.
- 松本俊彦 (2012) 薬物依存症に対する新たな治療プログラム「SMARPP」: 司法・医療・地域における継続した支援体制の構築を目指して. *精神医学* 54: 1103-1110.
- Miller, W.R. and Tonigan, J.S. (1996) Assessing drinkers' motivation for change: The Stage of Change Readiness and Treatment Eagerness Scale (SOCRATES). *Psychology of Addict Behav* 10: 81-89.
- Mitchell, D. and Angelone, D.J. (2006) Assessing the validity of the Stages of Change Readiness and Treatment Eagerness Scale with treatment-seeking military service members. *Mil Med* 171: 900-904.
- Mitchell, D., Angelone, D.J. and Cox, S.M. (2007) An exploration of readiness to change processes in a clinical sample of military service members. *J Addict Dis* 26: 53-60.
- 森田展彰, 末次幸子, 嶋根卓也, ほか (2007) 日本の薬物依存症者に対するマニュアル化した認知行動療法プログラムの開発とその有効性の検討. 日本アルコール・薬物医学会雑誌, 42: 487-506, 2007.
- Skinner, H.A. (1982) The drug abuse screening test. *Addict. Behav.* 7: 363-371.
- 鈴木健二, 村上 優, 杠 岳文, ほか (1999) 高校生における違法性薬物乱用の調査研究. 日本アルコール・薬物医学会雑誌, 34: 465-474, 1999

表1: 自習ワークブックSMARPP-Jr.の実施状況

実施地区 (分室)	本プログラム参加対象となる者(執行猶予判決を受けた乱用者)の人数(人)	プログラム参加を意思表示した者(SMARPP-Jr.を提供した者)の人数(人)	初回面接を実施した者(SMARPP-Jr.による自習を終えた者)の人数(人)	SMARPP-Jr.自習効果測定アンケートが回収できた者の人数(人)
北海道	6	1	0	0
東北	12	7	7	7
関東信越	19	4	3	3
横浜(分室)	0	0	0	0
東海北陸	26	15	13	11
近畿	9	7	5	5
神戸(分室)	1	1	1	1
中国	11	4	4	4
四国	8	0	0	0
九州	12	6	3	3
小倉(分室)	4	1	1	1
沖縄	14	2	1	1
合計	122	48	38	36
(%)	100.0%	39.3%	31.1%	29.5%

表2: 薬物種類別の生涯使用経験率(複数選択可: N=36)

薬物名	人数	百分率
トルエン	15	41.7%
ブタンガス	2	5.6%
覚せい剤	30	83.3%
MDMA	8	22.2%
大麻	19	52.8%
ケタミン	0	0.0%
LSD	4	11.1%
ヘロイン	0	0.0%
マジックマッシュルーム	5	13.9%
5-Meo-DIMP/MIPT	3	8.3%
その他	2	5.6%

表3: 最頻使用薬物(1つだけ選択)の種類

薬物名	人数	百分率
トルエン	4	11.1%
覚せい剤	21	58.3%
大麻	8	22.2%
5-Meo-DIMP/MIPT	1	2.8%
その他	2	5.6%
合計	36	100.0%

表4: 介入前後の薬物依存に対する自己効力感スケールとSOCRATES-8Dの比較 (N=36)

		実施前		実施後		z	P
		平均点	標準偏差	平均点	標準偏差		
薬物依存に対する自己効力感スケール	全般的な自己効力感 合計**	21.72	3.90	23.14	2.67	2.965	0.003
	個別場面の自己効力感 合計**	67.92	11.94	72.47	6.62	3.477	0.001
	総得点**	89.64	15.13	95.25	8.95	3.327	0.001
SOCRATES-8D	病識	28.53	5.45	27.36	5.18	1.784	0.074
	迷い	13.61	3.36	13.64	4.14	0.179	0.858
	実行*	33.56	5.23	35.22	6.49	2.236	0.025
	総得点	75.69	10.89	76.17	11.16	1.029	0.304

SOCRATES-8D, Stages of Change Readiness and Treatment Eagerness Scale, 8th version for drug dependence

* P<0.05, ** P<0.01

表5: 自習ワークブックの難易度と有用性に関する評価 (N=36)

	人数	百分率
ワークブックの難易度		
わかりやすい	7	19.4%
ややわかりやすい	10	27.8%
ふつう	7	19.4%
ややむずかしい	7	19.4%
むずかしい	5	13.9%
合計	36	100.0%
ワークブックの有用性		
大変役に立つと思う	13	36.1%
多少は役に立つと思う	15	41.7%
どちらともいえない	6	16.7%
あまり役に立たないと思う	1	2.8%
まったく役に立たないと思う	1	2.8%
合計	36	100.0%

(別掲5)

研究成果の刊行に関する一覧表

開発教材

研究分担者名	対象者	教材タイトル
近藤あゆみ	家族	薬物依存症者をもつ家族を対象とした心理教育プログラム 薬物依存症の多様性と人それぞれの回復について知る (家族向け教材)
近藤あゆみ	ファシリテーター	薬物依存症者をもつ家族を対象とした心理教育プログラム 薬物依存症の多様性と人それぞれの回復について知る (ファシリテーター用マニュアル)
近藤あゆみ	家族	薬物依存症者をもつ家族を対象とした心理教育プログラム 「家族の病気」としての薬物依存症 (家族向け教材)
近藤あゆみ	ファシリテーター	薬物依存症者をもつ家族を対象とした心理教育プログラム 「家族の病気」としての薬物依存症 (ファシリテーター用マニュアル)
近藤あゆみ	家族	薬物依存症者をもつ家族を対象とした心理教育プログラム 本人の望ましくない行動を増やし、望ましくない行動を減らす (家族向け教材)
近藤あゆみ	ファシリテーター	薬物依存症者をもつ家族を対象とした心理教育プログラム 本人の望ましくない行動を増やし、望ましくない行動を減らす (ファシリテーター用マニュアル)
近藤あゆみ	家族	薬物依存症者をもつ家族を対象とした心理教育プログラム 暴力への対応 (家族向け教材)
近藤あゆみ	ファシリテーター	薬物依存症者をもつ家族を対象とした心理教育プログラム 暴力への対応 (ファシリテーター用マニュアル)

書籍

著者氏名	論文タイトル名	書籍全体 編集者名	書籍名	出版社名	出版 地	出版 年	ページ
和田清	薬物乱用	(監修) 五十嵐隆	日本医師会雑誌 第141巻・特別号 (1). 生涯教育シ リーズ82「小児・思 春期診療 最新マ ニュアル」	日本医師 会	東京	2012	S262-S2 63
嶋根卓也	医者や薬局のくすりなら大丈夫？	松本俊彦 ＝編	中高生のためのメンタル系サバイバルガイド	日本評論社	東京	2012	74-79
松本俊彦	IV. 薬物関連精神障害の治療のプロセスと選択肢. 6. ワークブックを用いたグループ治療プログラムの実際	日本精神科救急学会	精神科救急医療ガイドライン: 規制薬物関連精神障害 2011年版	へるす出版	東京	2012	80-86

雑誌

発表者名	論文タイトル名	発表紙名	巻	ページ	出版年
和田 清	薬物乱用の問題点－医学的視点から	少年写真新聞社 中学保健	第	10-11	2012

	—第三回 中学生対象の全国調査からわかること	ニュース	15 22 号 付 録		
今村扶美, 松本俊彦, 小林桜児, 和田 清	心神喪失者等医療観察法における物質使用障害治療プログラムの開発と効果	精神医学	54	921-930	2012
松本俊彦	薬物依存症に対する新たな治療プログラム「SMARPP」: 司法・医療・地域における継続した支援体制の構築を目指して	精神医学	54	1103-1110	2012
松本俊彦, 成瀬暢也, 梅野 充, 青山久美, 小林桜児, 嶋根卓也, 森田展彰, 和田清	Benzodiazepines 使用障害の臨床的特徴とその発症の契機となった精神科治療の特徴に関する研究.	日本アルコール・薬物医学会雑誌	47	317-330	2012

平成24年度厚生労働科学研究費補助金
(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業)

研究成果報告会

薬物乱用・依存等の実態把握と 薬物依存症者に関する制度的社会資源の現状と課題に 関する研究

(研究代表者：和田 清)

日時：2013年2月23日(土) 13時00分より

場所：川口メディアセブン
キュポ・ラ本館棟7階 プレゼンテーションスタジオ

〒332-0015

埼玉県川口市川口1-1-1

TEL. 048-227-7622

交通：JR京浜東北線 川口駅東口 徒歩1分
無料 事前登録不要



問い合わせ先：国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所 薬物依存研究部
〒187-8553 東京都小平市小川東町4-1-1 TEL & FAX: 042-346-1954 和田、小島、中野

総合司会：嶋根卓也（国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所）
13:00-13:05 研究代表者挨拶 和田 清（国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所）

司会：嶋根卓也（国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所）

1. 13:05-13:35 飲酒・喫煙・薬物乱用についての全国中学生意識・実態調査(2012年)
和田 清（国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所）
2. 13:35-14:05 全国の児童自立支援施設における薬物乱用・依存の意識・実態に関する研究
庄司正実（目白大学 人間社会学部）
3. 14:05-14:35 監察医務院における異状死の検案・解剖結果からみた薬物乱用・依存等の実態に関する研究
福永龍繁（東京都監察医務院）
4. 14:35-15:05 全国の精神科医療施設における薬物関連精神疾患の実態調査
松本俊彦（国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所）
代理 谷渕由布子（同和会 千葉病院）
5. 15:05-15:35 薬剤師を情報源とする医薬品乱用の実態把握に関する研究
嶋根卓也（国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所）

休憩

司会：宮永 耕（東海大学 健康科学部社会福祉学科）

6. 15:55-16:25 薬物依存症者の社会復帰を目的とした制度の重なりに関する研究
宮永 耕（東海大学 健康科学部社会福祉学科）
 7. 16:25-16:55 薬物依存症者に関する制度的社会資源の地域格差に関する研究
山口みほ（日本福祉大学 社会福祉学部）
 8. 16:55-17:25 薬物依存症者を持つ家族に対する心理教育プログラムの開発と評価に関する研究
近藤あゆみ（新潟医療福祉大学 社会福祉学部）
 9. 17:25-17:55 司法関連施設における少年用薬物乱用防止教育ツールによる介入効果とその普及に関する研究
松本俊彦（国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所）
代理 谷渕由布子（同和会 千葉病院）
- 17:55-18:00 研究代表者挨拶 和田 清（国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所）

終了後、近くで懇親会を予定しております。

懇親会参加希望者は2月14日(木)までに、下記まで登録して下さい。登録制です。
(担当者 嶋根 shimane@ncnp.go.jp)

平成24年度厚生労働科学研究費補助金
(医薬品・医療機器等レギュラトリーサイエンス総合研究事業)

薬物乱用・依存等の実態把握と
薬物依存症者に関する制度的社会資源の
現状と課題に関する研究

(H23薬一般-014)

研究報告書

(総括研究報告書＋分担研究報告書)

主任研究者：和田 清（国立精神・神経医療研究センター 精神保健研究所）

2013年3月31日 発行